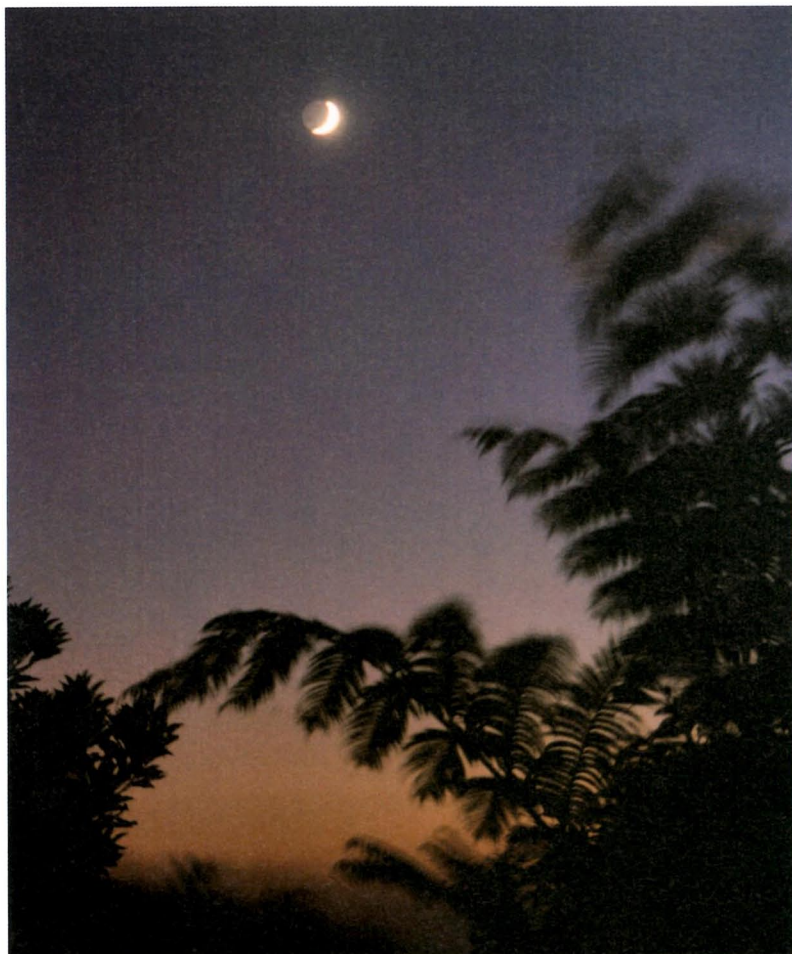


大井実の
BOOKな話

福岡市内で書店『ブックス
キューブリック』をいとむ
大井実さんの、本のある日
常をつれづれに。
文/大井実
撮影/川上信也

子どもにしかできない空想の旅を、
もう一度楽しんでみる、夏の日



冒険とかお気に入りのアニメとかおもちやとか、子どもの頃は誰しも、自分の好きなさまざまなことを考えながら空想の森を自由に旅します。自分のことを考えても、頭の中に広がる空想の世界と現実とが奇妙なほどあいまいになって混沌とした状況に陥ってしまおう——という経験も幾度となくありました。

ほとんどの子どもは、大人になると空想の旅をすることをやめてしまいます。でも、空想は子どもの情緒やイマジネーションを豊かにするために必要なものだと僕は思うんです。

たとえば、先ごろ亡くなったモーリス・センダックの代表作『かいじゅうたちのいるところ』。いたずらをしてお母さんに叱られ、寝室に閉じ込められた主人公の男の子が、大好きな、かいじゅうたちのいる島にたどり着いて王様になるという、かわいらしい空想をテーマにしたストーリー。僕は普段

あまり絵本は読まないのですが、この一冊は完成度が高く、大人のための絵本といってもいいでしょう。

物語はもちろん、絵もすばらしくアーティスティックで、ページをめくるたびにスクリーンを観ているような迫力と臨場感！ たくさん賞を獲得したこの絵本が出版されたのは今から50年近く前。にもかかわらず、まったく時代を感じさせない新鮮な魅力にあふれています。

子どもの視点で捉えた名作としての映画なら『ミツバチのささやき』。主人公の少女・アナの空想の世界にぐいぐい引き込まれて、いつの間にかアナの心の不思議な世界を旅する自分に気づきます。僕は80年代に映画館で観ましたが、アナのつぶらな瞳もとても印象的で、いまだに忘れがたい傑作です。

8月。幼い頃を思い出して、子どもにしかできない素敵な旅の欠片をもう一度探してみたいかがでしょう。

『かいじゅうたちのいるところ』
モーリス・センダック作・神宮輝夫訳/富山房/1,470円(税込)



©『ミツバチのささやき』
フランス映画社/'73年スペイン/99分

